

## <前回・19世紀キリスト教思想の遺産>

### (1) 近代的知と近代聖書学

1. 自然主義：西洋の「宗教と科学」関係論は、18世紀、大きな変動に遭遇する。現代人がイメージする科学、あるいは宗教と科学との関係理解、そして聖書研究も、この変動に規定されている。

3. 近接的な作用因による因果律と自然

→ 機械論的自然 cf. 錬金術的自然

日常的経験とのずれ (デカルト)

↓

超自然・奇跡の排除あるいは合理化

4. 近代聖書学においても超自然・奇跡の排除の傾向

5. 自然主義と歴史主義：近代的知の二つの動向 (因果律の二つのタイプ)

6. 「近代」と人間的現実の歴史化 → 近代歴史学、歴史的視点

現実は無常不変ではなく、変化する。人間の諸活動の集積、所産。

7. 知・人間的現実の地平としての歴史

相対性の意識＝歴史相対主義 → ニヒリズム

### (2) ドイツ思想の古典期：多様な伝統の総合の構想

・政治的宗教的な危機の時代：近代世界に適応したキリスト教の実験

啓蒙主義的合理主義とキリスト教的伝統との総合。

正統主義／敬虔主義／啓蒙主義

合理主義／ロマン主義

1. 近代神学の父シュライアマハー(Friedrich Ernst Daniel Schleiermacher, 1768-1834)

①近代プロテスタント神学の父：啓蒙主義的な神学的合理主義と伝統主義との間・総合  
同時に、近代的な宗教研究の広範な領域に対して、その起点となった。

②啓蒙思想とロマン主義の総合

③解釈学・弁証法・倫理学、体系家 → 信仰論 (『信仰論』(Glaubenslehre)) の影響

・人間性における宗教 → 弁証神学、宗教の本質概念 (本質論から現象論へ)

・実定性 → 個別的で歴史的な諸宗教への定位 cf. 理神論

2. 『宗教論』の信仰概念

3. 『信仰論』の意義：教義学の新しいスタイル、自由主義神学

・経験から教義へ

・近代的な諸学の体系内における神学の位置づけの明確化

倫理学、宗教哲学、弁証学からの借用命題から神学本論へ

↓

近代的学問としてのキリスト教神学の構想

4. 『信仰論』序説(Einleitung)

### (3) 理想主義＝観念論から実存へ

2. 19世紀のドイツ思想史におけるシェリングの位置：本質主義から実存主義へ

シェリングをカント以降のドイツ観念論の文脈に位置づけると共に、とくに後期シェ

リングの思想をヘーゲル的な本質主義に対する批判としての実存主義の起点と捉えている。

4. シェリング：本質主義 (ヘーゲル) と実存哲学 (後期シェリング→キルケゴール) の

関係 → シェリングの言う消極哲学と積極哲学の関係。

#### (4) 観念論の破綻と実存主義の徹底

近代批判としての実存主義

##### 1. キルケゴール (1813-1855)

###### ① 宗教批判者としてのキルケゴール

真のキリスト教と、近代市民社会において墮落したキリスト教

→ バルト (啓示と宗教との区別)

###### ② 反ヘーゲル主義 → 実存主義の先駆者

真理：客観性としての真理 / 主体性としての真理

体系：論理学の体系は可能である (諸イデアの相互関係) / しかし、歴史的な現実存在 (= 実存) に関わる事柄についての体系は、人間には不可能である

同時代性と同時性：信仰はキリストと信仰者とが同時に立つことによって可能になる。主体的真理として、無限の情熱の対象として、決断的に関わること。

ベルリン大学で後期シェリングの講義を聴講。

###### ③ 仮名と実名の二種類の著作 → 思想の表現形式、レトリックに注目

##### 2. キルケゴールの宗教批判 = 現代批判と市民社会のキリスト教

##### 3. 単独者の思想

「キリスト教的な英雄的精神とは、人間がまったく彼自身であろうとあえてすること、ひとりの個体的な人間、この特定の個体的な人間であろうとあえてすることである、一かかると巨大な努力をひとりでなし、またかかると巨大な責任を一人で担いながら、神の前にただひとりで立つことである」 → 単独者 → ルター信仰

##### 4. 不安 (『不安の概念』岩波文庫、1844)

##### 5. 絶望 (『死に至る病』岩波文庫、1849)

##### 6. 「本質 / 不安」から「実存 / 絶望」へ：墮罪 = 飛躍

##### 7. 人間の自己：自己関係という構造を組み入れた関係的存在

- ・ 自己反省、自己参照性、自己関係：「……「自己」に関する関係」に関する関係」……」 → 無限に多重化する存在者である (生成過程における自己)
- ・ 自己 = 生成しつつ在る存在者、自己になりつつある存在者 → 本来的な自己になるという課題

##### ・ 関係存在としての自己の存在根拠

1. 人間は自己自身の中にその存在根拠を有する → 自己組織化

始まりの問題 (宇宙の始まりのその前) と無限遡及のパラドックス

2. 関係存在の措定者を自己ではない他者として考える立場

・ 人間 = 自己関係的存在 → 自己になる課題 → 不安と絶望の可能性

##### 8. 実存弁証法と真のキリスト者への道

・ 精神の発展プロセス：

「美的段階 → 倫理的段階 → 宗教性 A → 宗教性 B」

### 3. バルト 1 —— 『教会教義学』以前

#### (1) 弁証法神学の意義

##### 1. Dialectical Theology

A title applied to the theological principles of K.Barth (q.v.) and his school on the ground that,

in distinction from the dogmatic method of ecclesiastical orthodoxy, which treats of God as a concrete Object (via dogmatica), and the negative principles of many mystics, which forbid all positive affirmations about God (via negativa), it finds the truth in a dialectic apprehension of God which transcends the 'Yes' and the 'No' of the other methods (via dialectica). Its object is to preserve the Absolute of faith from every formation in cut-and-dried expressions.

After the publication of Barth's Römerbrief in 1919 the Dialectical Theology rapidly spread, ... (Cross/Livingstone(eds.), *The Oxford Dictionary of the Christian Church*, Third Edition, 1997, p.476)

Alister McGrath(ed.), *The Blackwell Encyclopedia of Modern Christian Thought*, 1993.  
*Religion in Geschichte und Gegenwart*, Vierte Auflage (RGG<sup>4</sup>), Band1-8, Mohr Siebeck, 1998-2007.

## 2. 現代神学の発端 (自由主義神学・神秘主義批判)、『時の間』

バルト、ブルンナー、ブルトマン、ゴーガルテン、トゥルナイゼン、メルツなど。

近接して、ティリッヒ、ボンヘッフアー、ニーバー兄弟など。

↓

1920年代から60年代にかけて、プロテスタント神学の主潮流を形成する。

ラーナー、バルタザールなど、カトリック神学への影響。

日本：高倉徳太郎、熊野義孝、桑田秀延、滝沢克己ら、そして次の世代へ。

cf. 1980年代以降の自由主義神学の再評価の動向

バルトらの弁証法神学の批判的検討の必要性

## 3. 『岩波 キリスト教辞典』より

### 「弁証法神学」(寺園喜基)

第一次世界大戦後、1920年代、ヨーロッパに起こった神学運動、危機神学。主権的な神の自由を強調。バルトの『ロマ書』(1919)に出発点を持つ。人間的体験や内面性を排除するのではないが、それらを基礎づけるものとして神の自己啓示を強調。19世紀のプロテスタンティズムを自由主義、文化主義、歴史主義と批判。人間は罪人であり、神の言葉を聞くことができるのみ。神の言葉を強調。キリスト中心的な啓示理解を展開し、ヒトラーとドイツ的キリスト者に抵抗。しかし、ゴーガルテンは民族主義とナチズムに接近、ブルンナーは自然神学を認め、ブルトマンは実存論的神学へ進んだ。この神学運動は20世紀の神学と教会に大きな影響を与えた。

## (2) バルト神学

### 「バルト (Karl Barth, 1886-1968)」(天野有)

スイスのプロテスタント神学者。ベルン、ベルリン(ハルナック)、テュービンゲン、マールブルク(ヘルマン)で神学を学ぶ。ジュネーブの副牧師を経て1911年からザーフェンヴィルの牧師、10年間「赤い牧師」として労働問題に取り組む。第一次世界大戦を支持する神学教授らに失望し自由主義神学と決別。ブルームハルト父子の影響下『ロマ書』を執筆。以後40年にわたり、ゲッティンゲン、ミュンスター、ボン(告白教会の指導者としてナチ政府により罷免)、バーゼルの各大学で教える。戦中は「反ユダヤ主義は聖霊に対する罪である」としてスイス亡命のユダヤ人救援活動、戦後の西側陣営の核武装に公然と反対。晩年は10年間刑務所で説教。主著『教会教義学』。欧米のみならず、日本の教会・20世紀後半以降の神学にも多大の影響を与え続けている。

↓

バルト神学自体をキリスト教思想史の中に位置づけ解釈する作業。

「現在のわれわれの関心は、このような相対的神学史的评价をおこなうことよりは、むしろそれぞれのふくむ真理契機を明らかにし、その現代的意義を問うことにある。そしてそれぞれの真理契機をいかなる思惟の場において獲得できるかを問うことにある。」(森田、292)

4. 19世紀の近代社会に埋没したキリスト教とその神学(自由主義神学)に対する徹底的な批判(戦争神学批判)とそれによるキリスト教の本来の在り方の取り戻し。

- ・フョイエルバッハの宗教批判(神学は人間学である)の真理性。
- ・神学は固有の方法と基礎の上に形成されねばならない。

↓

ハルナックとの論争、神学の学問性をめぐって

19世紀の自由主義神学における学問的神学の基盤としての歴史学

1910年代から1920年代の学問論争の一端(客観的な学的体系か生か)

5. 宗教社会主義運動(スイス)、弁証法神学(危機神学、新正統主義、神の言の神学)の運動——ブルトマン、ブルンナー、ゴーガルテンら——

6. 神と人間との絶対的な質的差異、神の下における人間の危機 → 危機神学

- ・キルケゴールのモチーフ
- ・ヴァイスとシュヴァイツァーによる黙示的終末論の再発見の影響

終末論、しかも現在的終末論の強調。

「弁証法神学の動因」「第一は、従来の自由主義神学とは異なった新しい聖書解釈である。第二は、宗教改革者の神学の新しい解釈である。第三は、キルケゴールの再発見である。」(森田、278)

↓

『ローマ書』(第2版・序言)。「わたしに『体系』があるとすれば、それは、キルケゴールが『無限の質的相違』と呼んだものに、その消極的かつ積極的意味において、できるだけ注目することである」。

ヘルマン・コーヘンの「知られざる神」、ルドルフ・オットーの「絶対他者」

↓

「有限性において自立しようとする人間にたいする審きとして先鋭化する。」(森田、282)  
「弁証法神学の最初の出発点は、今日ではいずれの神学者によっても堅持されていない。」(森田、292)

7. 歴史神学の後退。

歴史神学は必要ではあるが、「補助学」(Hilfswissenschaft)に過ぎない。

「弁証法神学の問題点は、知られざる神自身は歴史のどこにも入らず、ただ有限者に「触れる」だけである、というバルトの解釈にある。」(森田、290)

「バルトは任人間イエスの本来の歴史を控えめに(接続法によって)「原歴史」(Urgechichte)と呼び、これにたいして参与する人々の歴史を「第二義的、派生的、間接的意味」の歴史と呼ぶ。第一の歴史において第二の歴史は存在する。」(森田、347)

8. アンセルムス論と神学の方法：知解を求める信仰、信仰固有のラチオ(神学固有の学問性)の展開としての神学。神・啓示から。楕円に対する円＝キリスト論集中。

↓

神の言葉の神学、教会教義学

**<参考文献>**

0. バルト関係：『カール・バルト著作集』『教会教義学』新教出版社。  
『バルト・セレクション』（全7巻）新教出版社。
1. ティリッヒ『キリスト教思想史II』（著作集別巻3）白水社。
2. H・ツァールント『20世紀のプロテスタント神学（上）（下）』新教出版社。
3. J・モルトマン『二十世紀神学の展望』新教出版社。
4. 森田雄三郎『キリスト教の近代性』創文社。
5. J・R・フランク『はじめてのバルト』教文館。
6. 大木英夫『バルト』講談社。
7. ユンゲル『神の存在 バルト神学研究』ヨルダン社。
8. トーランス『バルト初期神学の展開』新教出版社。
9. 大崎節郎『カール・バルトのローマ書研究』『恩寵と類比 バルト神学の諸問題』新教出版社。
10. 吉永正義『神の言葉の神学 バルト神学とその特質』新教出版社。
11. 佐藤司郎『カール・バルトの教会論 旅する神の民』新教出版社。
12. 福嶋揚『カール・バルト 破局のなかの希望』ふねうま舎。
13. 芳賀力『神学の小径』（全5巻）キリスト新聞社。